

副胃の1例と文献的考察

福岡大学第1外科

梅野 寿実 三股 俊夫 有馬 純孝

DUPLICATION OF THE STOMACH: A CASE REPORT AND A REVIEW OF LITERATURE

Toshimi UMENO, Toshio MIMATA and Sumitaka Arima

The 1st Department of surgery, Fukuoka University School of Medicine

われわれは26歳男性で胃潰瘍にて胃部分切除を行い、術後の標本検索にて胃と交通を有し管状の形態を示す副胃の合併例を経験したので報告した。副胃は胃前庭部前壁側から小弯側にかけて小鶏卵大程の大きさでみられたが、管腔の粘膜は近位2/3は幽門部粘膜に被われ、遠位1/3は十二指腸粘膜に被われている非常に稀有な症例であった。

われわれの集計しえた本邦の副胃報告例は26例で文献的考察をおこなったが、10歳以下の症例が11例を占めていた。好発部位は前庭部大弯側で、形態的には嚢状のものが大多数であった。各臓器と交通を有するものは4例でそのうち3例は管状例であった。

索引用語：十二指腸粘膜併存副胃，副胃本邦報告例

はじめに

1911年、Wendel¹⁾によって初めて報告された副胃は重複胃、胃壁嚢腫とも称され、消化管重複症のなかでも稀なものとしてされているが、最近われわれは術後の標本検索にて副胃のなかでも極めて稀な十二指腸粘膜をともなった管状の副胃症例を経験したので、文献的考察をくわえて報告する。

症 例

患者：26歳，男性。

家族歴：既往歴に特記すべきことなし。

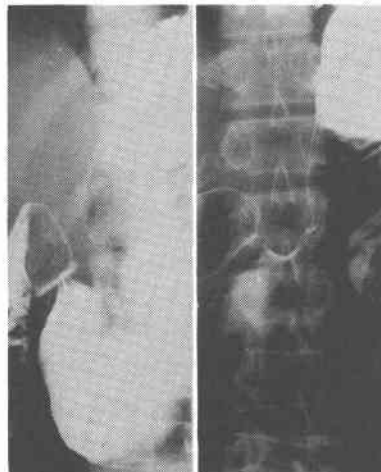
主訴：上腹部痛，上腹部膨満感。

現病歴：昭和52年8月より上腹部膨満感，上腹部痛，背部痛があり次第に嘔気，体重減少がみられ近医受診，胃潰瘍の診断をうけて来院した。

入院時所見：一般状態は比較的良好。上腹部に軽い圧痛を認める他には胸腹部理学的所見に異常はなく，諸検査にてもとくに異常はなかった。

胃X線所見：胃角部前壁側を中心として周辺の盛り上がりとし粘膜皺襞の集中像をともなった良性的潰瘍性病変がみられたが，陰影欠損や圧排像などの所見はみられな

図1 胃X線像



胃角部にニッシェ像がみられる。

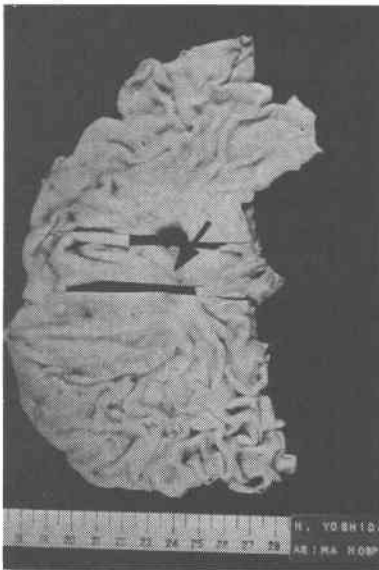
かった(図1)。

内視鏡所見：胃角部前壁側に楕円形の大きな潰瘍があり，辺縁は穿堀され周囲に強い浮腫がみられたが，その他の異常所見はみられなかった(図2)。

図2 胃内視鏡



図3 摘出標本



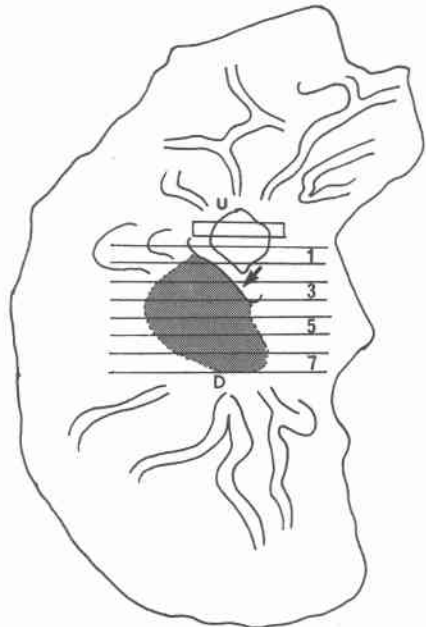
矢印の部分に粘膜の割れ目様の所見がみられる。

以上より活動性の胃潰瘍と診断し手術を行った。

手術所見：開腹するに胃角部前壁側に拇指頭大の硬結を触知し、さらに幽門側より小鶏卵大の柔らかい腫瘤様硬結を触知した。しかし胃切開を行って粘膜をみるもとくに異常なく胃部分切除を行った。

切除標本：胃体下部前壁小弯前側より大きな消化性潰瘍がみられたが（（図3）前壁側の割が入っている部分）、潰瘍の小弯幽門側直下に約2.0cmの粘膜の割れ目様所見があり（（図3）の矢印の部分）、割れ目は管状に胃壁を穿通していた。漿膜側ではドーム様の小鶏卵大の軽い隆起が胃体下部の小弯から前壁側にかけてみられた切除標本のシェーマを（図4）に示した。

図4 切除胃のシェーマ



副胃、潰瘍、割れ目様の粘膜部位と標本作成部位を示す。

U：潰瘍、D：副胃、↓：割れ目様の粘膜

図5 連続切片

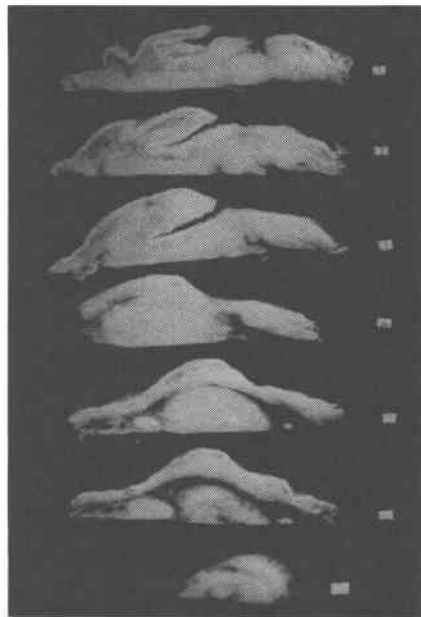
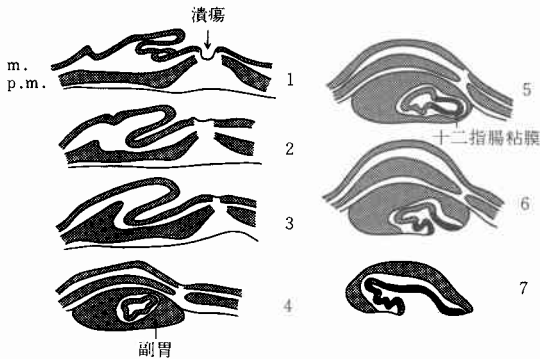
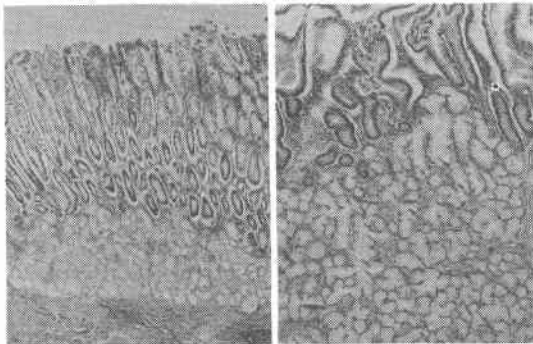


図6 連続断面シェーマ像



副胃粘膜は連続した胃固有筋層によって被われている。

図7 副胃組織像



右. 幽門部粘膜, 左. 十二指腸粘膜
遠位側の副胃粘膜には葉状の絨毛とブルネル腺を伴った十二指腸粘膜がみられた。

連続断面：前庭部前壁小弯側寄りに本来の胃の内腔と交通を有する管状の腔があり、これは胃壁内を小弯漿膜側にのびて胃固有筋層内に押し入り、次いで漿膜を通過して小鶏卵大程の固有の筋層と管腔をもつ腫瘤を形成していた(図5, 6)。肥厚した筋層は本来の胃固有筋層と連続しており、図5, 6の4~6では筋層が背中合わせの形になっていた。腔の末端は胃壁外に露出しているが術中操作のため破られたものと思われる。

組織学所見：管腔を被う筋層は通常の胃固有筋層と同様の平滑筋で、管腔内面は粘膜の組織によって被われていた。管腔の近位2/3の粘膜には幽門腺がみられ本来の胃前庭部と同様の壁構造を示しているが、遠位1/3の粘膜は十二指腸粘膜で、葉状の絨毛とブルネル腺がみられた(図7)。

胃の潰瘍は UI-IV の慢性胼性潰瘍であった。

以上の所見より副胃をもつ胃に消化性潰瘍が併発したと診断した。

考 察

副胃は従来の記載によれば胃に近接または連続して存在し、腔の内面には胃または他の消化管粘膜を有し、胃固有筋層と同様の平滑筋を持つものとされているが²⁾³⁾⁴⁾、胃囊腫など他の疾患との鑑別に苦慮する例もあり、Palmer⁵⁾ は本病変を Enterogenous cyst として胃囊腫の 1 病変に分類している。

成因的には胎生期の発育異常が考えられ種々の説がとなえられている。Lewis⁶⁾ は胎生期腸管憩室の遺残よりの発生をと見え、Bremer⁷⁾ は胎生期腸管より胃が形成される際に粘膜上皮が 1 部縦軸方向に融合して別の管腔を形成するととなえた。その他にも種々の考察がなされているがいずれも不十分で現在のところ詳細は不明である。

本邦では1934年に石井⁸⁾が副胃の最初の報告をおこなって以来、現在まで自験例も含めて26例の報告を集計しえたので文献の考察をおこなった。

1) 男女比：男性15例、女性11例で男性にやや多くみられている。

2) 年齢および主訴：(表1)年齢はすべての年齢層におよんでいるが、特に10歳以下の小児、乳幼児で11例(42.3%)にみられているのが注目される。Bartels⁴⁾は58例のうち1歳以下の症例は30症を占めたと報告している。主訴としては上腹部痛、嘔吐、腫瘤触知が多いが、10歳以下の小児では嘔吐、腫瘤触知が多く、特に1歳以下では特有の症状となっている。

表1 年令別症例数と主訴

	1才以下	~10才	~20才	~30才	~40才	~50才	~60才	60才以上	計
症 例 数	6	5	1	4	3	2	3	2	26
主 訴	上腹部痛	3	1	3	2	2	3	1	15
	嘔 吐	3	3				1	2	9
	腫瘤触知	3	3						6
訴	下 血			1					1
	胸焼け				1				1
	不 明	3							3

3) 胃透視所見：22例におこなわれており、11例(50%)に腫瘤陰影および陰影欠損像がみられ、圧排像3例、幽門狭窄像2例、硬直像1例でこれらはいずれも囊腫状の形態を示すものであった。管状例は4例のうち1例は十二指腸憩室穿孔像⁹⁾、1例はバリウムの十二指腸

への走行異常¹⁰⁾で、本症例と伊藤の報告例¹¹⁾では、異常はみられなかった。

4) 胃内視鏡所見：10例に行われており、粘膜下腫瘍所見5例、ポリープ様所見2例、隆起性病変所見1例、副胃の病変像がみられなかったもの2例となっている。

胃透視および内視鏡にて副胃に特有な病変というものはみられていない。

5) 病変部位：(表2) 噴門部、体部、前庭部別では圧倒的に前庭部が多く、24例のうち17例(71%)を占めており、体部は4例、噴門部は1例であった。壁在性では大弯側が多数を占め24例のうち14例(58%)、次いで後壁の5例、前壁3例、小弯2例であった。すなわち前庭部大弯側が好発部位といえるがこれは Bartels⁴⁾ や Lewis⁶⁾ 等の報告とも一致するところである。

表2 病変部位

	噴門部	体部	前庭部	全長	不明	計
前壁			3			3
大弯		1	10	2	1	14
後壁		3	2			5
小弯	1		1			2
不明			1			1
計	1	4	17	2		24

表3 形態および交通性

形態	囊状	交通性			計
		胃	十二指腸	脾臓	
管状	1	2	1	18	19
不明				1	4
					3

6) 形態：(表3) に示す様に囊状が19例で大多数を占め、管状は4例と少ない。各臓器と交通を有するものは4例で、そのうち3例は管状である。十二指腸と交通を有するものが2例⁹⁾¹⁰⁾、胃と交通を有するものは本症例の1例、囊状の形態ながら脾臓と交通のあるもの1例¹²⁾であった。

Lewis⁶⁾ は39例のうち36例が囊状で3例は管状であり、交通性は39例のうち6例にみられ、胃と交通を有するもの2例、十二指腸およびメッケル憩室と交通を有するもの1例、胃と十二指腸両方に交通を有するもの2例と報告している。

7) 副胃の大きさ：胡桃大から鶏卵大のものが大多数を占めているが、大きいものでは島田¹⁰⁾の大弯全長におよぶ 38.0×18.0cm のものや、伊藤¹¹⁾の6カ月女児で

副胃と重複食道を合併しており正常胃よりやや大きいものなどがあげられる。

8) 治療：23例に手術がおこなわれており、15例に胃部分切除術、8例に副胃摘出術がなされている。

9) 術前診断：術前に副胃の診断がつけられた症例はほとんど皆無で、多くは胃粘膜下腫瘍、胃嚢胞、胃憩室などがなされているが、乳幼児では嘔吐、腹部腫瘤触知などの症状により幽門狭窄症と診断される事も多い。

10) 組織学所見：副胃の組織像は通常の胃壁構造と同様で、すなわち管腔の内面より胃粘膜(また他の消化管部粘膜)、粘膜筋板、粘膜下組織、胃固有筋層、漿膜の構造がみられるが、時には粘膜筋板や漿膜を欠く例もみられ、粘膜と固有筋層が明確であれば問題はないと思われる。副胃の筋層は本来の胃固有筋層と連結しているのが普通であるが、石井³⁾の剖検例は両端が索状物になっており特殊例である。副胃の粘膜は本症例を除いて全例胃粘膜によって被われていたが、本症例は遠位1/3に十二指腸粘膜および粘膜下組織がみられた。組織的には胃十二指腸重複症とすべきものかもしれないが、前述のように他の消化管部粘膜を有するものも副胃の中に入れられる事もあり、胃前庭部に限局し固有筋層と連続した筋層をもっている事から副胃の定義を充分みたと考え副胃と診断した。

副胃管腔に潰瘍をみとめた症例は5例⁹⁾¹⁰⁾¹¹⁾¹³⁾¹⁴⁾みられたが、3例は管状例であった。交通性を有するものは食物残渣により、交通性のないものでは内圧の上昇により潰瘍をつくりやすい状態になると思われる。

11) 合併症：胃の他の部位に潰瘍がみられたものは本症例を含めて3例¹⁵⁾¹⁶⁾、Ⅱc+Ⅲ型の早期胃癌合併例1例⁹⁾、重複食道合併例1例¹¹⁾であったが、他の合併奇形例はみられなかった。欧米の文献ではヘルニヤ心奇形などの先天性奇形の合併例が報告されている⁴⁾⁶⁾。

まとめ

1) われわれは26歳男性の極めて稀な胃の1例を経験したので報告した。

2) 本症例は胃と交通を有し、形態的には管状で、副胃管腔の粘膜は近位2/3は幽門部粘膜であったが遠位1/3には十二指腸粘膜がみられた。

3) 本邦における胃26例の文献的考察をおこなったが、10歳以下の小児例は11例(42.3%)を占めた。好発部位は前庭部大弯側で、形態的には囊状のものが大多数を占め、各臓器と交通を有したものは4例でそのうち3例は管状であった。副胃粘膜に十二指腸粘膜がみられた

のは本症例の1例のみあった。

ご協力いただいた病理学教室今井環教授に深謝する。
なお本論文の要旨は第12回日本消化器外科学会（於弘前）にて発表した。

文 献

- 1) Wendel, W.: Beschreibung eines operative entfernten congenitalen Nebenmagens. Arch. F. Klin. Chir., **95**: 895—898, 1911.
- 2) Rowling, J.T.: Some obstructions on gastic systs. J. Surg., **46**: 441—445, 1959.
- 3) Abrami, G. and Dennison, W.M.: Dupliaction of the stomach. Surgery, **7**: 294—298, 1972.
- 4) Bartels, R.J.: Duplication of the stomach. Case report and review of the literature. Amer. Surg., **33**: 747—752, 1967.
- 5) Palmer, E.D.: Benign intramural tumors of the stomach. Medicine, **30**: 81—96, 1951.
- 6) Lewis, P.L., et al.: Duplication of the stomach. Report of a case and review of the English literature. Arch. Surg., 141—634, 1961.
- 7) Bremer, J.L.: Diverticula and duplications of the interstinal tract. Arch. Path., **38**: 132—140, 1944.
- 8) 石井武一: 極めて稀有なる胃真性過剰形成の1例. 東京医事新誌, **2884**: 1823, 1934.
- 9) 清水克英他: 重複胃に潰瘍を生じた1例. 新潟医学会誌, **89**: 353—354, 1975.
- 10) 島田寛治: 成人の胃重複症の1治験例. 胃と腸, **11**: 1135—1139, 1976.
- 11) 伊藤喬広他: 小児の胃重複症. 小児外科内科, **4**: 221—229, 1972.
- 12) 日浅善一郎他: 副胃の構造を示す脾臓嚢腫の1例. 長崎医学会誌, **33**: 1057—1059, 1958.
- 13) 黒岩延男他: 胃粘膜下嚢腫の1例. 外科治療, **26**: 115—119, 1972.
- 14) 岡村 健他: 副胃. 胃と腸, **12**: 641—645, 1977.
- 15) 積 惟貞他: 胃嚢腫の3例. 秋田県医学会誌, **3**: 31—37, 1975.
- 16) 笠井敏雄他: 胃, 回腸, 盲腸の消化管重複症の3治験例. 臨床外科, **28**: 1311—1315, 1973.